

第2章

彦根の維持向上すべき歴史的風致

彦根は、古くから畿内と北国・東国とを結ぶ交通の要衝として長い歴史を刻んできた。そこには豊かな文化財が生まれ、時代と地域によって異なる個性を持ち、多様な展開を示しながら、そこに生きる人々と共生してきた。

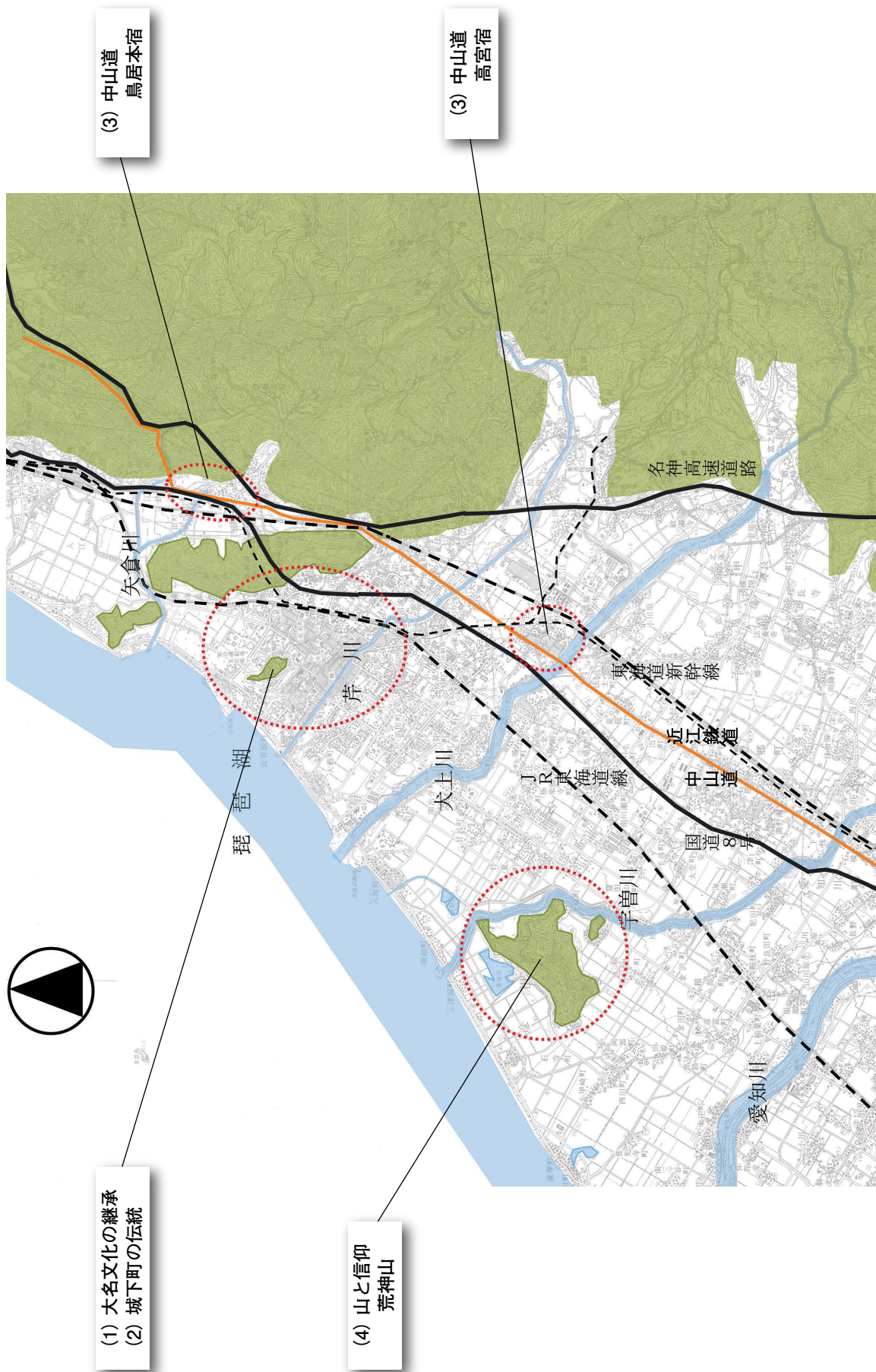
とくに江戸時代は、彦根藩の政治・経済・文化の中心として都市構造を発達させ、今日に残る歴史的建造物などの文化財は、人々の活動の場として彦根に固有の伝統と文化を育んできた。その歴史的風致は、将来にわたって維持し向上を図るべき貴重な資産である。



小江戸彦根の城まつり

縮尺 S≒1 / 50,000

図第2章 彦根の維持向上すべき歴史的風致



(1) 大名文化の継承

① 現代に生きる「能と狂言」の継承

彦根では、能や狂言が定期的に上演され、子どもたちや大学生による発表会も催される。このような文化が根付いてきた背景には、彦根藩主井伊家に由来する大名文化の継承が色濃く見られる。

江戸幕府は能を式楽に定めて奨励した。彦根藩でも幕府に倣って能役者を召し抱え、能舞台を築いて能を催した。最盛期には藩内に3棟の能舞台が存在した。現在、表御殿を復原した彦根城博物館の中央にある能舞台は、寛政12年(1800)に当所に築造された歴史的建造物である。明治11年に表御殿が解体された際、能舞台のみ他所に移築されており、博物館建設に伴い原位置に戻した。

日頃は、展示室に展示している井伊家伝来の能面や能装束と同様に歴史的建造物としてガラス越しに見ていただいているが、年に数回はこの能舞台を用いて能や狂言を催し好評を博している。幕末の大老として知られる井伊直弼が自ら制作した能「筑摩江」(つくまえ)や狂言「鬼ヶ宿」(おにがやど)・「狸腹鼓」(たぬきのはらつづみ)も上演される。博物館には「筑摩江」や「鬼ヶ宿」(原題は「安達女」(あだちおんな)の直弼自筆の草稿本も存在している。

博物館の能舞台では、このような定期上演によるプロの能・狂言のほか、滋賀県立大学能楽部の定期発表や博物館事業「子ども狂言教室」の発表会などさまざまに活用されている。「子ども狂言教室」は、もともと学校教育との連携で生まれた事業であり、彦根の伝統芸能を若い世代に広め継承する目的で始められた。その練習の成果を博物館の能舞台で披露していただいたことが発端であった。子どもたちが伝統の能舞台で声を張り上げながら舞う姿は、彦根に特有の歴史的風致である。

② 「茶の湯」の伝統

彦根には、千家など町衆の茶の湯とは異なる、大名茶の系譜を引く茶の湯



子ども狂言稽古風景



彦根城能

文化が今日まで息づいている。石州流一会派という井伊直弼が創設した茶の湯の道統を継ぐ団体が健在であり、市内各所で茶会が催されている。石州流は、近年、全国の城下町にある石州流各派が連合して全国組織ができ、彦根でも大会が催されて活況を呈した。

彦根藩では、伝来する茶道具や記録から歴代の藩主が茶の湯を嗜んだことが知られる。13代藩主井伊直弼は茶の湯にも精進した藩主であった。31歳の若さで武家茶道石州流の一派創立を宣言し、弟子を抱えた。特別史跡内にある埋木舎(うもれぎのや)には、直弼が茶の湯に励んだ澍露軒(じゅろけん)という茶室が公開され、しばしば茶会が催されている。



玄宮園での茶会

名勝玄宮園の鳳翔台や臨池閣などは直弼が幕府の数奇屋坊主をもてなした記録の残る歴史的建造物である。鳳翔台では、今も呈茶のもてなしを受けながら、大名茶の世界を満喫できる。また、市内には城内や城下の直弼ゆかりの箇所でも茶会が催され、多くの招客で賑わっている。

彦根城博物館の小学生を対象とした普及事業「はくぶつかんへ行こう」では、展示室で直弼ゆかりの茶道具を見学し、直弼ゆかりの茶室「天光室」で実際に茶の湯を体験する。「天光室」に茶道具をしつらえ、客として露地から入ってきた子どもたちは、狭い茶室で伝統的な「もてなしの文化」を学ぶ。また、奥向きの「御座之御間」では、お茶の先生のお点前を拝見した後、自ら茶を点てる。子どもたちにとって、「ほんものとの出会い」は貴重な体験であり、彦根の伝統文化を継承できる場となっている。

茶の湯文化は和菓子の文化ともつながっている。彦根には、今も和菓子店が多く店を構えている。創業が江戸期にさかのぼる店も健在である。江戸時代後期に、和菓子店「糸屋重兵衛」で作られていた餅菓子である「益寿糖(えきじゅうとう)」は、城下で人気があり、城にもしばしば納めていた。近年、この益寿糖が資料に基づいて復原され、博物館の茶席に出されて好評であった。



復原された「益寿糖」

そのほか「埋れ木」や「柳のしずく」など井伊直弼にゆかりの名をつけたものや「三十五万石」のように彦根藩の石高を名づけたものなど、茶菓子としての個性を競っている。名古屋から伝わった外郎(ういらう)が、「彦根ういろ」と名を変えて今日でも味わうことができる。

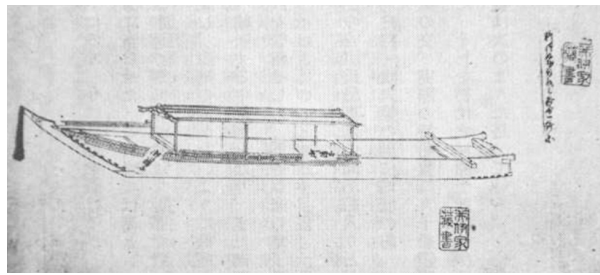
③ 堀の利用—「御好屋形船」の運行

特別史跡彦根城跡の内堀には、「御好屋形船」(おすきやかたぶね)が運行している。彦根藩主井伊家に伝来した「御好屋形船」の船遊びが現在も行われている。船着場は、江戸時代の石段を保護して使用している。江戸時代には藩主とその一族に限られた使用であった。



彦根城の内堀を運行する「御好屋形船」

彦根の城下町を画す3重の堀は、いずれも松原内湖を通じて琵琶湖につながっていた。彦根城は琵琶湖を意識した水城であった。3重の堀はその当初は軍事的な機能として構築されたものであったが、平和な時代が到来すると軍事的な用途とは異なるさまざまな目的に使用された。「御好屋形船」はその1例である。内湖に通じていたから、城内のほかにも内湖岸にある井伊家の菩提寺や琵琶湖岸の下屋敷などにも遠出した記録が残っている。



「御好屋形船」絵図

④ 小江戸彦根の「城まつり」

彦根では、毎年11月3日に旧城下町一帯で恒例の「城まつり」が催され、馬上の井伊直政を始め、甲冑に身を包んだ人々が旗印を掲げて勇壮にパレードする。パレードは、旧外堀ルートから「いろは松」を経て城表の佐和口より城内を通過し、本町筋を経て再び外堀ルートにもどるコースをとる。中堀に面した「いろは松」一帯は、景観重要樹木第1号の松並木が延び、道幅も9間あって通常の街路よりかなり広い。江戸時代には、彦根藩家中がこの通りに居並び、藩主の国入りを迎え、また出立を見送った歴史的な場所であり、当時は「松の下」と称されていた。今日でも「いろは松」越しに国宝の天守が遠望でき、中堀に面して佐和口多聞櫓(西側は重要文化財)の白壁



景観重要樹木のいろは松

が長く延び、中堀の外には井伊直弼ゆかりの埋木舎(特別史跡)や旧池田屋敷長屋門(市指定文化財)などがある彦根城屈指のロケーションの地である。当所を通過する際、勇壮な武者行列はより一層景観に映える。この城まつりパレードは、佐和山神社の祭礼である佐和山まつりが起源となっている。清凉寺井伊家墓所(国史跡)内にあった護国殿は、井伊家の祖神である初代井伊直政と二代井伊直孝を祭神とする社殿で、江戸時代には、元旦、2月1日(直政命日)、6月28日(直孝命日)のみ開門され、藩士の参詣が許された。明治維新後、神仏分離により清凉寺から離れて佐和山神社となった。その祭礼である佐和山まつりは、毎年春の4月1日に催され、今日の城まつりと同様に、甲冑を身にまとった武者が馬上や徒歩で市中を練り歩いた。明治34年に挙行れた井伊直政300年大祭(没後300回忌)は特に盛大であり、その模様を描いて卷子にした資料が旧家に大切に伝存されている。

昭和13年、佐和山神社は財政難などの要因から井伊神社に合祀されることとなり、佐和山まつりも一時途絶えたが、そののち彦根観光協会が催す秋の城まつりに継承された。その際、甲冑武者が馬上や徒歩で市中を練り歩くという祭りの形態も城まつりに受け継がれて今日に至っている。



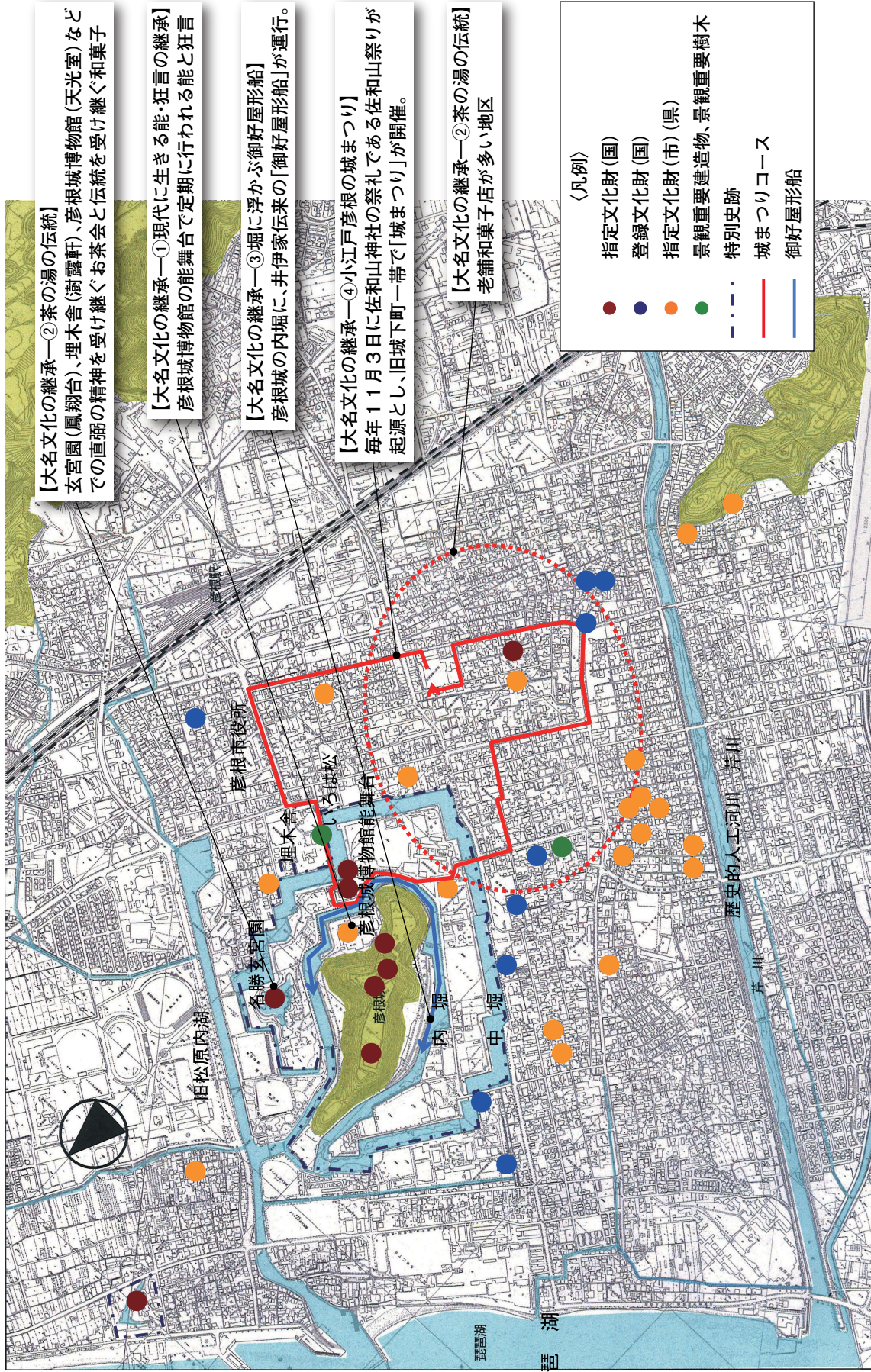
稚児行列



城まつりパレード

図第2章 (1) 大名文化の継承

縮尺 S≒1 / 15,000



(2) 城下町の伝統

⑤ 足軽「組」の結束—足軽屋敷

彦根には、江戸時代以来の足軽屋敷の町割りが静かな住宅街として、そこに住む人々と共生している。今も足軽の末裔の人々が比較的多く居住しており、江戸時代の足軽「組」を継承する単位としてまとめ、各種の会合や集会、清掃や防火防災活動、その他の自治活動が熱心に行われている。江戸時代以来の狭い街路であるため、特に防火防災活動は熱心であり、組を単位とする定期的な訓練とともに、各家の玄関には必ず赤い防火用バケツを配備している。一方で狭い路地は車の往来が少なく、人々の会話が飛び交う絶好の社交の場であり、路地を遊び場とする子どもたちも多い。

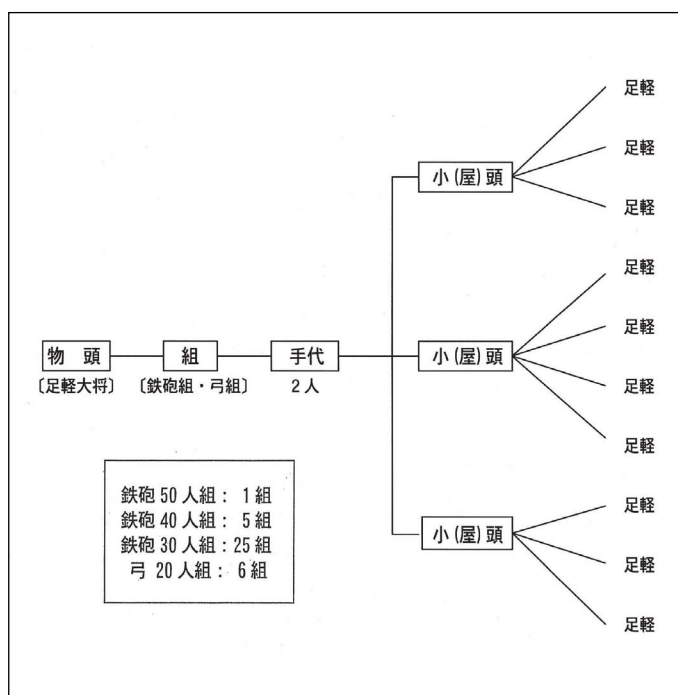


現在も残る善利組足軽屋敷



足軽屋敷の公開

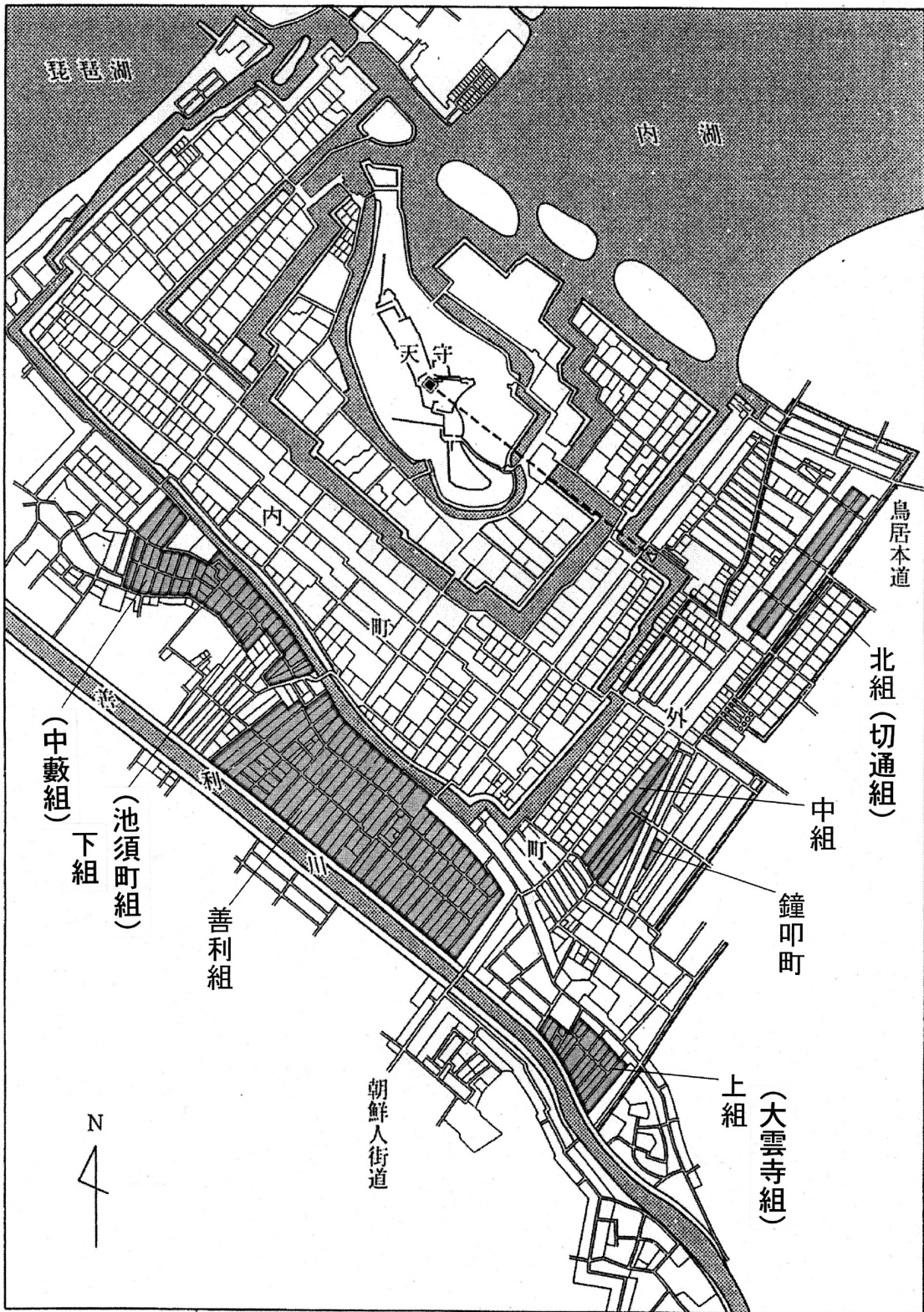
彦根城下の足軽屋敷は、城下町のもっとも外側に、城下を取り囲むように屋敷を連ね、彦根城と城下町を守備する役割を担っていた。彦根藩の足軽は、慶長期に中藪組6組と善利組12組が設置されたのを皮切りに、元和期には加増に伴う足軽増強により善利組8組と上組1組を設置。同様に寛永期には切通組3組・中組4組・上組2組がそれぞれ新たに設置された。このように彦根藩の足軽組屋敷は総体として江戸時代の早い段階に整えられた。



彦根藩の足軽

中でも善利組の規模は大きく、その屋敷地は第4郭の南、外堀と善利川の間、東西約750メートル、南北約300メートルを占めた。幕末期には戸数およそ700を数えた。間口5間(約9メートル)、奥

中でも善利組の規模は大きく、その屋敷地は第4郭の南、外堀と善利川の間、東西約750メートル、南北約300メートルを占めた。幕末期には戸数およそ700を数えた。間口5間(約9メートル)、奥



渡辺恒一「彦根藩足輕組屋敷一覧表」『彦根城博物館研究紀要十九』二〇〇八より

彦根城下の足輕組屋敷の位置

行10間(約18メートル)ほどの敷地に、木戸門と塀に囲まれた小さいけれど武家屋敷の体裁を整えた建物が連綿と続いた。建物内は、土間をへて玄関・台所・納戸・座敷の4部屋が「田」の字形に連なり、8畳の座敷には床があり庭を望むことができた。藩によっては「足軽長屋」も多い中、彦根藩の足軽屋敷は門を構えた庭付き一戸建て。小さいながらも武家屋敷としての体裁を整えた構えであった。このような特徴的な佇まいが、今日でも数を減らしながら、1間半の狭い道筋に続いている。

足軽は「足軽く疾走する歩卒」の意。戦国時代の戦の主力であった集団戦では重要な位置を占めた。彦根藩では、足軽1,120人について鉄砲を扱う鉄砲組と弓を扱う弓組に分け、さらに鉄砲50人組を1組、同40人組を5組、同30人組を25組、弓20人組を6組の合計37組に編成し、各組には手代2人が配属されて都合1,194人が足軽集団を形成していた。この足軽組を預かったのが、おもに1000石～300石取の「物頭」であった。彼らは戦時には「足軽大将」として足軽組の指揮をとる立場にあり、平時においても足軽を束ねる手代を介して訓練・組織化して実践に備えさせた。

足軽の屋敷は、組を単位として居住地も隣接していた。道筋は南から北へ1丁目～15丁目に区分され、道筋の両側に組を単位として集住することが多かった。この丁目の呼称は昭和44年に廃され、大きく芹橋1丁目と2丁目の行政単位に分けられることになったが、現在でも旧丁目を単位とする自治活動がおこなわれている。江戸時代以来の「組」は丁目ごとの自治に変化したが、かつての訓練・組織化された足軽組の結束が今も生きている。冒頭の熱心な自治活動は、このような歴史的な背景があって顕在化したものである。

旧善利組足軽屋敷の家屋は、実際に調査を実施すると基本的な間取りは同じであっても、木戸門や塀のすぐ内側に主屋が接するタイプと前庭を設けるタイプ、平入りと妻入りなど、彦根藩の作事方がその時々官舎として建てており一様ではない。ただ、それらの歴史的建造物が、今日なお東西約750メートル南北約300メートルの間、通りの左右に整然と家並みを形成しており、そこで営まれる人々の活動とともに、良好な市街地の環境を呈している。

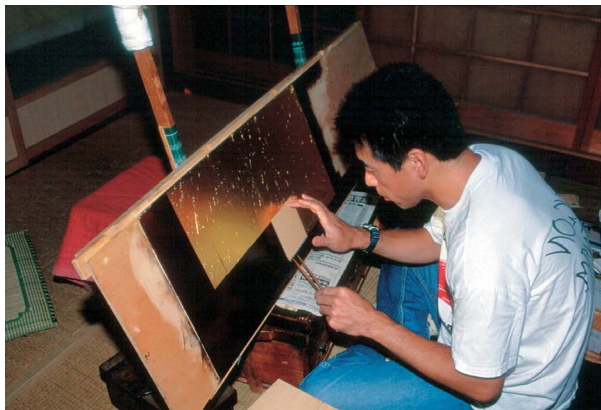
⑥ 城下町の「伝統工芸」「商い」の継承

彦根には、江戸時代の創業という仏壇店が軒を連ねている界隈がある。彦根城の南東、芹川沿いに七曲りと呼ばれる地域に、「彦根仏壇」の伝統技術が息づいている。

彦根仏壇は、木地・宮殿・彫刻・鍔金具・漆塗・蒔絵・金箔押の7部門の各職人が仕事を分担して制作しており、これを「工部七職」と呼び慣わしている。彼らが制作した部材を問屋が組み上げ、仕上げを施して販路に流すのである。したがって、部材の多くは職人から職人へ移動しながらしだいに完成していくため、職人はおのずと近くに集住し仏壇街を形成した。そのことは今も変わらず、連綿と続く歴史的建造物が仏壇職人の作業の場となっている。七曲りの中位に位置する仏壇店は、中二階に白漆喰で虫籠窓を設け、1階を作業場兼展示スペースとする典型的な店構えである。玄関を入ると板敷きの作業場が広がっており、完成した仏壇が壁に面して並び、中央には作業



七曲り仏壇街のまち



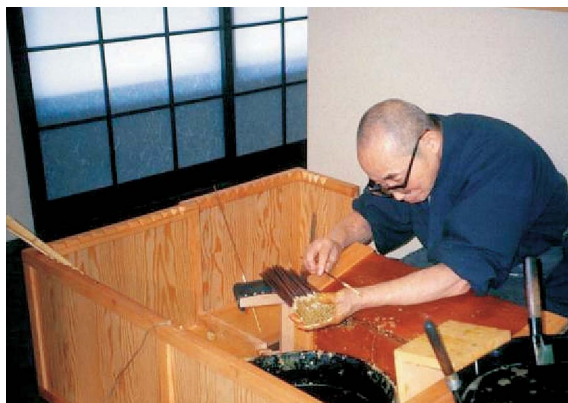
彦根仏壇七職

台があって職人による組み立てなどの作業が行われる。客が来ると作業の手を休めて完成した仏壇を見せながら商談の場と化す。こうした仏壇店が七曲りの通りの両側に数多く存在する。伝統的な技術と歴史的な景観が一体となって今日に継承されており、良好な市街地を形成している。

七曲りは、中山道の高宮宿方面から彦根の城下町にいたる彦根道に沿って築かれたまちなみである。前方を見通せないように通りを幾度か屈曲させているところから、七曲りと通称されたものである。正保元年(1644)に町割りが行われ、初期には古鉄屋・塩屋・道具屋などが多かったが、やがて仏壇関連の職人が集住するようになり、今日の仏壇街に至っている。近年は家具調の小形仏壇の開発など、若い職人の感性による商品開発も活発になっている。

一方、江戸時代には、城下町の外堀の外側に位置する外町(とまち)の中心的な町として河原町があった。花しょうぶ通りは、河原町の上手にあり上河原町と

称した。日用品を売る店が多く見られる賑やかな町であったが、今日でも江戸時代以来の歴史的建造物が数多く残り、花しょうぶ通り商店街として、歴史的建造物の建物内で昔ながらの糍(味噌)屋・蠟燭屋・魚屋・酒屋などの商いをする人たちが健在である。



彦根ろうそく

糍屋は江戸時代中期頃に創業と伝える老舗であり、今も江戸時代以来の製法で味噌を作り、店頭販売している。蠟燭屋は、「彦根ろうそく」として広く知られた特産品であった。質がよく長持ちするのが「彦根ろうそく」の特徴であり、作りが丁寧であった。手作りの芯のまわりに熱い蠟を手で掛けて作るころから、「生掛けろうそく」とも称された。幕末に創始され、近年まで4代目の当主が店を守り、「城下町夢あかり館」で創作蠟燭の指導を行うなど、「彦根ろうそく」の普及に努めてきた。花しょうぶ通りの入り口近くに店を構える魚屋は、新鮮が売り物。中二階に出格子窓を設けた伝統的な店構えの1階では、馴染みの客との間に威勢のよい会話が弾む。江戸時代には、琵琶湖の幸などの魚介類は船町から城下を経て本町近くの魚屋町に一度集積された。魚屋町には今も入口に井戸を残す家が多いが、城下の魚屋は、魚屋町の魚問屋を介して仕入れ、店頭売りや荷い売りを行った。酒屋は大きな店構えの造り酒屋である。奥には幾つもの土蔵が並び、酒の甘い香りが漂う主屋とともに重厚な造りが特徴である。

また、彦根では、11月下旬の数日間、旧城下町の古いまちなみを残す各商店街が、それぞれ趣向を凝らして「ゑびす講」と称して大売出しを行う。歩行者天国として開放された道路では、フリーマーケットや屋台なども繰り出して盛況である。



「ゑびす講」の賑わい

ゑびす講は100年近い歴史をもつ催しで、各商店街が1年間の商売を感謝して始めたものである。かつて「彦根のゑびす講は日本一」と言われたほどに賑わった。琵琶湖の対岸からも船を出して買い物客が大勢やってきたと言う。農繁期を終えた人々が、正月用の衣類や調度などを求めて彦根に集まったのである。

ゑびす講は、本来、橋向町に今もある恵比寿神社の祭であったが、この祭に

乗じて商店街が大売出しを行うようになったと考えられている。現在でも各商店街や振興組合の役員が正装して恵比寿神社にお参りした後に、ゑびす講が始まる。古くは「恵比寿講」と書き、彦根では「ゑべすこ」と発音した。

⑦ 城下町の伝統行事

8月の彦根の伝統行事に「鬼債ない(きせない)」がある。子どもたちが縞や縮緬のきれいな着物を着飾り化粧をし、「きせない」「きせない」の唄を合唱しながら、大雲寺、千代神社、宗安寺を結ぶルートを練り歩く。大雲寺は、慶長10年(1605)彦根藩初代井伊直政の上州(群馬県)高崎から佐和山への移封に伴い、天山曇廓が創建した曹洞宗の古刹である。大雲寺のある花しょうぶ通りは歴史的建造物が良好に残り、浴衣姿の子どもたちの黄色い声が古いまちなみに木霊する。子どもの後見として帯を直したり汗を拭いたり世話係と、その後ろの見物人とで行列ができ、真夏の彦根の風物詩となっている。



「きせない」の行列

このきせない行事は、太平の御世における町人の文化振興策として彦根藩主の命により始まった伝え、春に町娘に花見を奨励したのと対をなし、夏気分を横溢させるために催したものである。

また夏の盆の時期には、芹川で「ひこね万灯流し」の行事が行われる。地域の人々が諸霊を慰めるため灯籠に送り火の灯りを入れ、芹川に流す。数千の灯籠が川面に美しく映え、幻想的な夏の風情をつくっている。霊をまつる盂蘭盆会に起因し、門外に火を送ることが転じて万灯を流し先祖の霊を慰めることになったと考えられている。江戸時代には琵琶湖畔で行っていた行事であったようだが、いつしか芹川で行うようになった。



ひこね万灯流し

善利組足軽屋敷のすぐ外側を流れる芹川は、彦根城の築城時に城下町の排水を良くするために大土木工事を行って、



芹川沿いのケヤキ並木

延長およそ2kmを新たに付け替えて琵琶湖に直流させた人工河川である。そのため、護岸を補強するため植えられたと伝えるケヤキなどの古木が並木を形成して現存しており、散策や憩いの場として市民に親しまれている。ケヤキの古木には樹齢300年を超えるものもあり、ケヤキ並木越しに見る足軽屋敷のまちなみは、歴史的景観としても優れている。

芹川は、江戸時代には普請方の指導により足軽が芹川やケヤキ並木の維持管理を担ってきた。現在は地元自治会が主体となって、芹川の草刈りや清掃活動を月に一度実施するほか、樹医の応援を得てケヤキ並木の手入れを行っている。

⑧城下町に息づく寺社信仰

彦根には藩政時代から続く寺院が多くみられる。旧寺町での集中的な配置のほか、城下の防御を考慮して内町と外町に計画的に配された寺院は、今も多くの檀家衆によって支えられている。その中には藩政時代からの檀家も多く、寺院での活動が年中行事にもなっている。元旦の修正会(しゅじょうえ)に始まり、2月の



宗安寺の法要

涅槃会(ねはんえ)、盆には「施餓鬼」(せがき)、秋には「御十夜」(おじゅうや)や「報恩講」など宗派ごとの行事がさまざまに展開され、檀家は事前の奉仕作業、当日のお参り、後片付けなどを行って寺院を支え守る。彦根城下のように寺院が林立する地域では、各所で行事が行われ、その活動が城下町の風情ともなっている。それは、世代を越えて引き継がれ今日に至っている。

旧元川町の浄土宗宗安寺は井伊家ゆかりの寺として、大阪夏の陣で彦根藩士に討ち取られた豊臣方の名将木村重成の首塚があることで知られ、山門は佐和山城の大手門を移築したと伝える。また、朝鮮通信使の正使・副使・従事官の三使の宿泊所に充てられており、通信使から贈られたと伝える高官像(彦根市指定文化財)などが残っている。通信使一行が彦根に旅装を解く日は、通信使との筆談唱和を求める人々で一帯が大いに賑わったという。

一方、彦根では神社の伝統に支えられた祭礼も数多く催される。北野神社では1月に「十日ゑびす祭」が催され、参拝客に甘酒やお神酒が振舞われ、餅まきや福笹を買い求める人で賑わう。また、5月には「天神祭」が2日にまたがって催される。前日に宵宮祭、当日に本殿祭と神幸祭がある。宵宮祭の午後には、15町を鐘と太鼓でふれ回る「ふれ太鼓」に始まり、当日の本殿祭、そして

神社の御鳳輦を先頭に御旅所を往復する渡御（とぎょ）と続く。渡御には稚児行列や氏子 11 町の子ども神輿が加わり、総勢は 500 人を越える。

北野神社は、彦根城の築城前に彦根山に存在した彦根寺を琵琶湖岸の現在地に移した際に、2 代藩主直孝の出生地である上野国（群馬県）後閑村の北野寺に鎮座する天神を勧請したことに始まる。



北野神社の「十日ゑびす祭」

5 月の「天神祭」の渡御では、現在の城町から本町界隈を経由する。これらの地域は、かつて魚屋町・桶屋町・職人町など町人が職業ごとに分化配置された町であり、今でも随所にその面影を残す歴史的建造物を認めることができる。中でも魚屋町には入口に魚を洗う井戸を残した例が多く、11 棟からなる長屋の存在はとくに貴重である。こうした建物の前を渡御の一行が通過する景観は、彦根に固有の歴史と伝統を明瞭に示しており貴重である。

同じ 5 月には、千代神社でも春季例大祭である「神幸渡御祭」が挙行される。神輿が市内を練り歩き、多くの人出があつて盛況である。千代神社は、本殿が重要文化財となっている古社であり、天宇受売命（あめのうづめのみこと）を祭神とし、芸能の神様として多くの氏子に支えられ、人々の崇拜を集めている。神輿は、京町・旭町・佐和町・立花町・中央町を練り歩く。江戸時代には外堀の内外辺りに位置し、比較的武家屋敷の多かった地域である。今日でも昔ながらの通りには歴史的建造物が残っており、神輿の賑わいが一体となって良好な市街地の景観を形成している。

この千代神社に隣接して存在するのが金亀会館である。金亀会館は、以前は、西本願寺の教堂として用いられるとともに、地域行事の会場として利用されることも多く、千代神社の春季例大祭では会場の一つとなり、多くの人々に親しまれていた。



旧彦根藩校の講堂であった「金亀会館」

金亀会館は、江戸時代には彦根藩の藩校の講堂であった歴史的建造物である。江戸時代、とくに後半以降

になると、各藩とも藩士の文武奨励のため藩校設立の気運が盛り上がり、各地で藩校が建設された。彦根藩でも寛政 6 年（1794）に 11 代藩主井伊直中の

下で藩校設立が決議され、同 9 年には城下第二郭西端の地（現在の彦根西中学校運動場辺り）に起工、同 11 年、藩校稽古館として開校した。稽古館開校から 31 年を経た天保元年（1830）、12 代藩主直亮は、藩校の名称を弘道館に改めるとともに洋学を講義に取り込むなど藩校の改革を実施。明治 4 年（1871）の廃藩置県により廃止されるまで弘道館教育は多大な成果をあげた。現在、中央町に残る金亀会館は、藩校の講堂を大正 12 年に当地に移築し、西本願寺の教堂として使用してきたものであり、藩校唯一の現存建物として貴重である。平成 18 年度に彦根市指定文化財としており、平成 20 年度にはこの金亀会館の建物を所有者より寄付を受けた。

⑨「時報鐘」の音風景

彦根城に登城する途中、本丸下の太鼓丸から毎日決まった時間に鐘の音が聞こえる。江戸時代から絶えることなく、朝から 3 時間おきに、6 時、9 時、12 時、15 時および 18 時の 1 日に 5 回、城下に鳴り響く鐘の音は、「お山の鐘」として市民に親しまれている彦根城の時報鐘である。環境庁の「日本の音風景百選」にも選定されている。

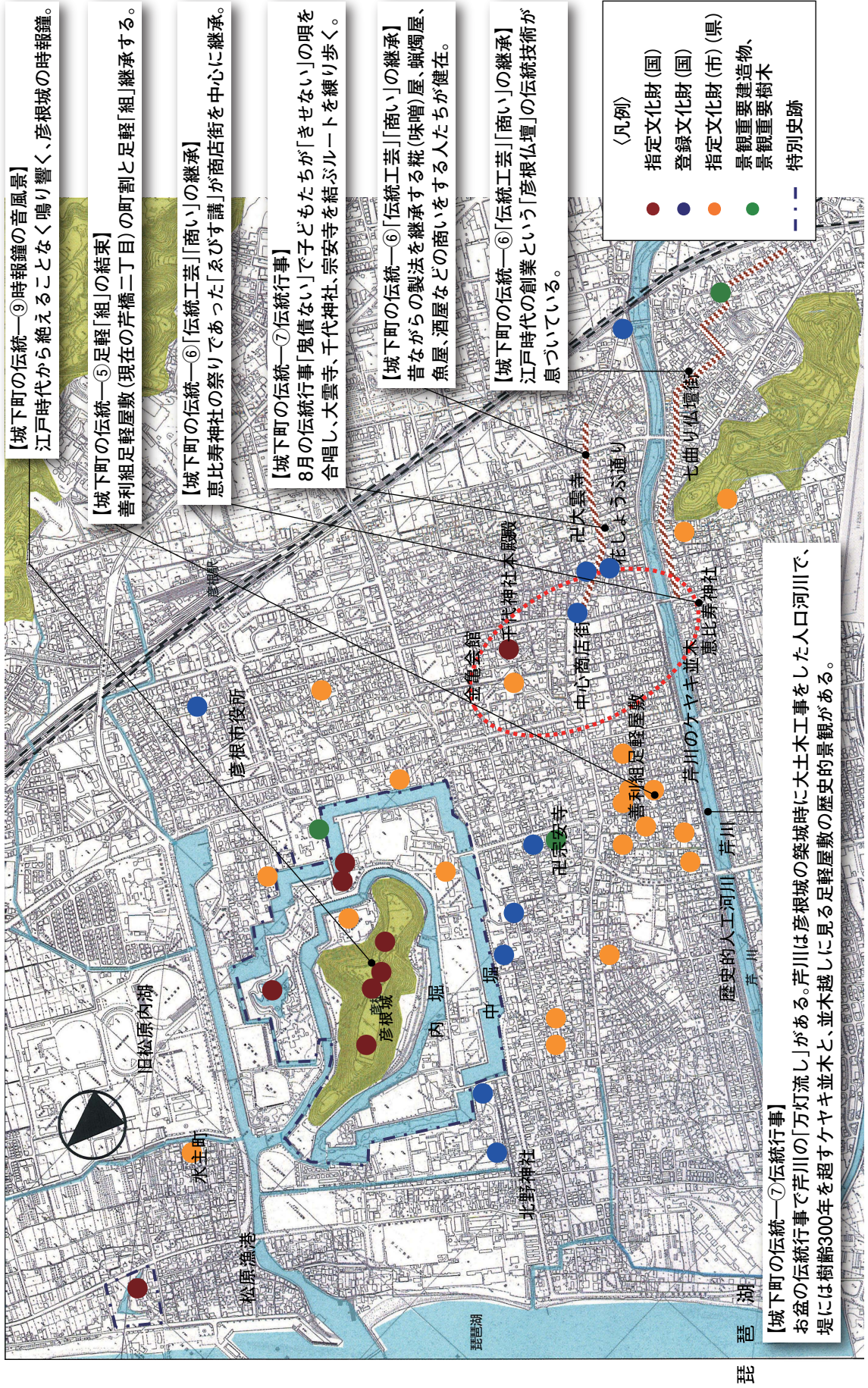
築城当初は、鐘の丸に設置され、城下に時を知らせていたようだが、より遠くまで音色が届くように太鼓門近くの高台に移されたと伝える。江戸時代の絵図には「鐘突所」と記されている。現在の鐘は愛知郡長村（東近江市長町）の鑄大工黄見新左衛門ら 5 人により製作されたもので、弘化元年（1844）に 12 代藩主井伊直亮が発注したものと伝えている。城下の人々はシンボルとして天守を仰ぎ、時報鐘で時を知り、日々の生活を営んできたのである。この「時の鐘」は、音風景として彦根独自の歴史的風致を形成している。



時報鐘

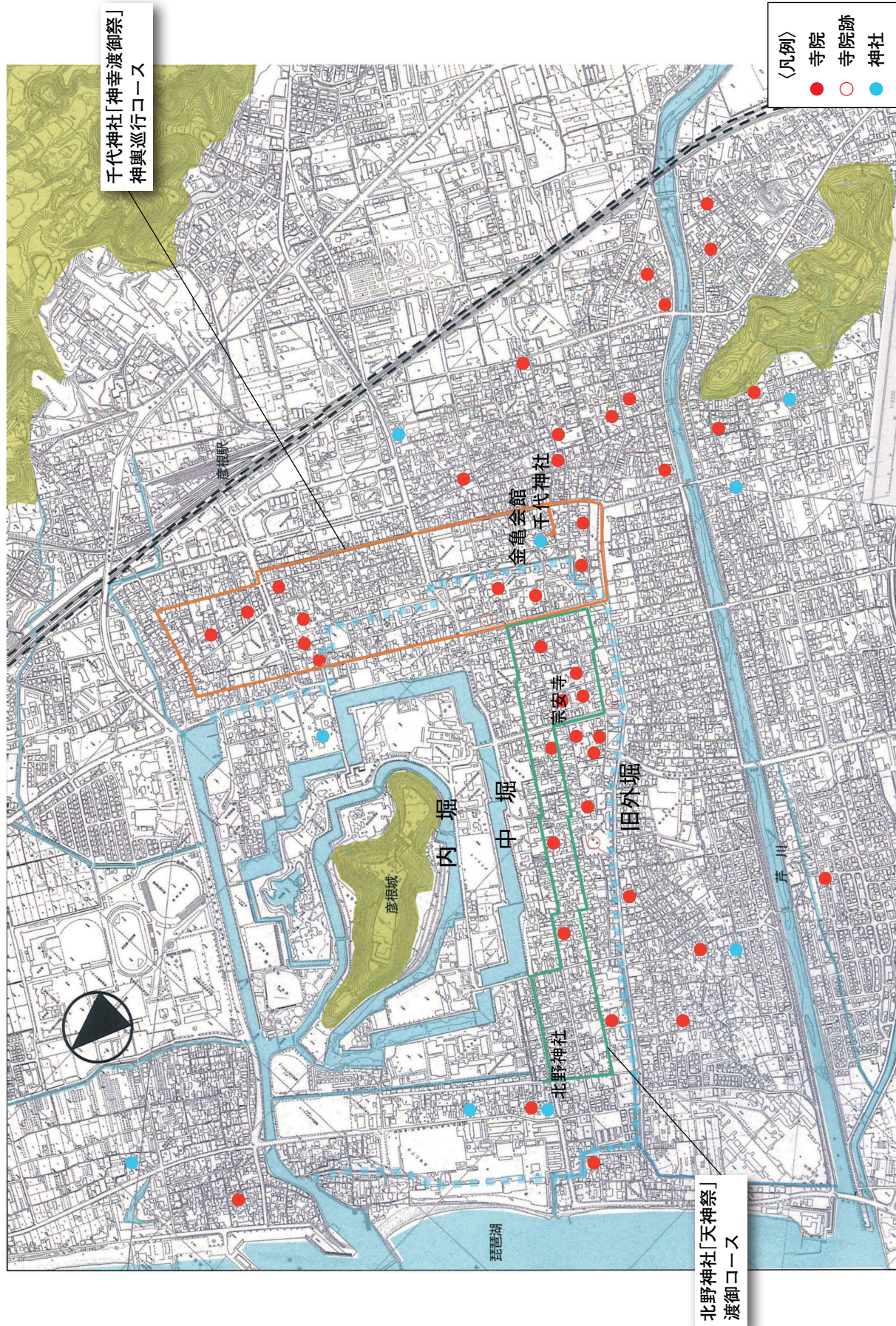
図第2章 (2) 城下町の伝統

縮尺 S₁1 / 15,000



縮尺 S≒1 / 14,000

図第2章(2) 城下町の伝統—城下町の寺院・神社



(3) 中山道と宿場町

⑩高宮宿と高宮まつり・高宮布

高宮の町は、夜になると常夜燈に火が点り、早朝の街道には打ち水が施される。中山道の宿場として古くから多くの人々が往来し、旅人をもてなしてきた人々の思いが引き継がれた町である。街道筋には常夜燈のほか道標・一里塚・松並木・高札場跡・本陣跡・脇本陣跡・旅籠跡など、街道や宿場に特徴的な施設や歴史的建造物が、今も数多く姿を留めている。



高宮神社の常夜燈

高宮宿は江戸から 64 番目の宿である。古代犬上郡 10 郷の 1 つ、高宮郷の地である。中世には荘園が成立し東山道筋に市も立った。その後、高宮氏の高宮城下としての歴史を歩むが、天正元年（1573）の小谷城戦で高宮城は炎上し、高宮氏は一族離散してしまう。高宮氏の菩提寺高宮寺には、高宮氏歴代の墓所が現存し、重要文化財木造伝切阿坐像など時宗ゆかりの豊かな文化財を今に伝えている。

高宮が宿場町として再生するのは、江戸時代初頭からのことである。高宮宿は、宿の石高 2923 石 6 斗 2 升で美濃の鵜沼宿に次いで高い。高宮宿には本陣 1 軒、脇本陣 2 軒があった。本陣・脇本陣の詳細な絵図が伝来し、本陣の表門が残っている。高宮宿のほぼ中央に、多賀大社への正式な参詣道（表参道）である高宮道（多賀道）が延びている。入口には石造の巨大な鳥居が建っている。県指定となっている高さ 11m の多賀大社一の鳥居である。



高宮宿 多賀大社一の鳥居

高宮の中央付近に位置する高宮神社は、高宮の 17 すべての町民が氏子として崇敬し祭事に関わっている。創建は鎌倉時代頃と想定されており、古くは十禅師宮（じゅうぜんじのみや）または山王権現と称したことから、日吉社領であったと考えられている。明治 5 年には郷社となり今日に至っている。

この高宮神社は春と秋に大祭が催される。中でも春祭りは「高宮太鼓祭り」

とも呼ばれる大掛かりな祭りである。宵宮をへて本祭りの当日は、「渡御（とぎょ）」と呼ばれる巡行が催される。本町の神輿を先頭に、17町の町旗・鉦・太鼓が続き、行列の最後を締めくくるのは騎馬の神官や氏子総代たちである。太鼓は胴回りがおよそ6mもある大太鼓を台棒で荷



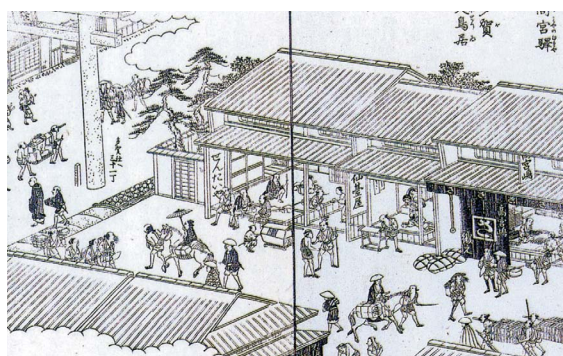
高宮太鼓祭り

り、太鼓と鉦の音に人々の歓声が混在して、祭りを盛り上げる。こうした大祭の起源は、明治3年の洪水で資料が流失してしまったため明瞭ではないが、以後の記録にすでに現在の原形が示されており、古くに遡る大祭であったと想定される。

高宮神社の南には、築後250年余を経過しているという元庄屋の屋敷がある。黒壁に複雑な屋根組みの落ち着いた佇まいが、歴史の風格を感じさせる。この屋敷周辺には、袖壁に卯建を上げたまちなみや掘割など、かつての宿場の景観が良く残っており、提灯屋や造酒屋などの伝統産業に従事する家も古くからの佇まいを今に伝えている。

平成20年、高宮地域文化センターで催された「高宮布まつり」では、高宮布の製法や作品を紹介し、製織道具などの展示のほか、機織りの実演や体験が行われた。高宮布は今では見るのが少なくなったが、近年、再び注目が集まるようになってきている。

高宮布は、高宮周辺で生産された上質の麻布であり、「高宮上布」とも通称された。古く室町時代にその記録が確認され、室町時代以降は将軍や諸大名の贈答品として珍重されたものであり、井伊家が彦根の地に封じられて以降も、年々の進物に用いている。近郷で織られた高宮布は、いったん高宮に集荷されて売り捌かれた。城下町の武士や町人の内職としても織られていたものであり、袴・袴や暖簾などに用いられていたようである。



「近江名所図会」に描かれた高宮布の店

図2 (3) 中山道 高宮宿



高宮神社 春季大祭渡御列順 (平成16年度) (高宮神社提供)

一番	鉦	本町	十番	鉦	中町
二番	太鼓・鉦	新町	十一番	太鼓・鉦	門口町
三番	鉦	七軒町	十二番	鉦	高橋町
四番	太鼓・鉦	竹之腰町	十三番	太鼓・鉦	鳥居上町
五番	鉦	宮町	十四番	鉦	西町
六番	太鼓・鉦	両小路町	十五番	太鼓・鉦	中北町
七番	鉦	御旅町	十六番	鉦	五社町
八番	太鼓・鉦	東出町	十七番	太鼓・鉦	大北町
九番	鉦	上町			

⑪鳥居本宿と合羽・赤玉神教丸

旧鳥居本宿の街道筋中央には、道中合羽形の看板を軒先に掲げた家が存在する。かつての名産「鳥居本合羽」の看板である。鳥居本合羽は馬場弥五郎なる人物が四国伝来の合羽製作技術を学んで商いを始めたのが起源と伝えているが、やがて柿渋を塗布するなどの技術改良を重ね、鳥居本宿が天候の荒れやすい木曾街道の



鳥居本合羽の看板

入口にあたるという地の利もあって、道中合羽としての需要を拡大していった。文化文政期(1804~30)には15軒を数えたという。

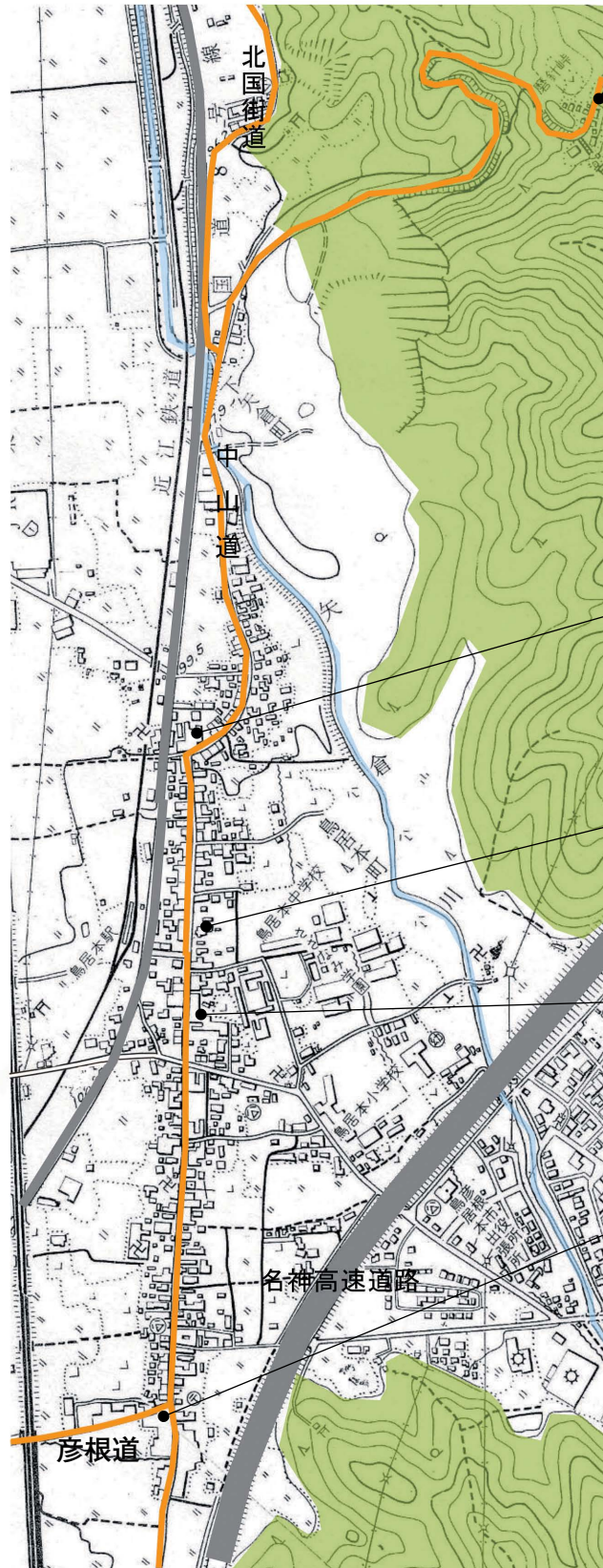
旧鳥居本宿の街道が大きく鉤手に曲がる一角にある重要文化財有川家住宅は、もうひとつの名産「赤玉神教丸」の製造・販売を現在も続ける大店舗である。赤玉神教丸は、下痢・腹痛・食傷などに効果のある妙薬で、多賀大社の神教によって調合したため、その名があるという。今も彦根辺りでは、各薬局で赤玉神教丸が売られ、薬箱に赤玉神教丸を忍ばせている家庭も多い。万治元年(1658)頃の創業と伝え、店舗販売を主に、各地の薬屋と特約して取次販売なども行った。最盛期には製造職人・販売人・番頭などを合わせると80人余に達したようであり、その店頭販売の賑わいは『近江名所図会』などにも描かれるほどであった。現存する重要文化財(建造物)は、宝暦年間(1751~64)の建立と伝え、幕末の和宮降嫁や明治天皇の北国巡幸の折には小休所に当てられた。



重要文化財有川家住宅(赤玉神教丸本舗)

鳥居本宿は、近世以前は佐和山城の城下町の縁辺部に位置していたが、江戸時代に入って間もなく、小野宿に代わって宿駅の機能を持つことになった。百々村、西法寺村、鳥居本村、上矢倉村の4村が1つになって宿場を構成しているため、今も極めて細長いまちなみとなっている。本陣1軒、脇本陣2軒は高宮宿と同じだが、規模はそれほど大きくはない。ただ、江戸時代以来の歴史的建造物は良好に残り、宿場の面影を良く伝えている。

図第2章 (3) 中山道 鳥居本宿



中山道摺針峠

有川製薬
赤玉神教丸

本陣跡

松本商店
鳥居本合羽

彦根道道標

(4) 山と信仰

⑫荒神山 葬送の山から信仰の山へ

荒神山の山頂にある荒神山神社は、厄災を祓う荒神として広く信仰されている。中でも毎年6月末に催される夏越しの祓「水無月祭」は、荒神山神社最大の祭としてよく知られる。拝殿前のススキで作られた茅の輪をくぐって無病息災を祈り、子どもを火の災いから守るために子ども神楽が奉納される。山麓の遥拝所には露店が並び、大変な賑わいとなる。

また、山中の南西に位置する稲村神社は、春季例大祭「太鼓登山」が良く知られる。山麓9町がそれぞれ受け台に乗せた大太鼓を、各町から稲村神社に担ぎ上げるのを競う勇壮な行事である。担ぎ棒を組み立て、大太鼓を台に乗せて飾るなど祭の準備は若衆が行う。およそ100年の歴史があると伝える。

荒神山周辺は、彦根では早くから開墾の進んだ地域である。おそらく水稻農耕の伝来とともに、近くを流れる宇曾川の水を引き込んだ水田開墾が始まり、やがて水稻農耕がもたらす富を一元的に掌握した人物によって荒神山の山頂近くに全長124mの大型前方後円墳(古墳時代前期)が築かれた。

そして古墳時代後期になると、山中に小円墳が30基以上築造されるなど、古墳時代を通じて葬送の山として機能してきた荒神山であるが、奈良時代以降、新しく伝来した仏教の要素が加わり、神仏への信仰の山となった。室町時代には平流山と呼ばれ、山頂の奥山寺と山麓の天台宗寺院や神社が深く関わりながら、天台宗延暦寺系の修験の一拠点であったことが知られる。江戸時代



荒神山



荒神山神社の水無月祭



稲村神社の太鼓登山

になると、奥山寺は厄災を祓う荒神として今日に至るまで広く信仰されている。
奈良時代以降、荒神山は長く信仰の山として存続しているのである。

図第2章(4) 山と信仰 荒神山

